פָּרָה(パーラー)「多く実らす，繁殖する」のミドゥラーシュ

はじめに

第一テサロニケ５章 17 節に「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべてのことにおいて感謝しなさい。」とありますが、意識的に（魂で）喜びなさいと言っているわけではないと思います。気になって、さらに御言葉を探ってみました。

ガラテヤ人への手紙５章 22、23節には「御霊の実は、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制です。」とあります。このことから、「喜び」は人の努力や意思で生み出すものではなく、御霊によって湧き出るものなのだと分かりました。

פְּרִי(ペリー)「実」について、もっと深く知りたくなりました。そこで今回は、פְּרִי(ペリー)「実」の動詞である、פָּרָה(パーラー)「多く実らす，繁殖する」について調べてみようと思います。

1.　初出箇所

先ず、פָּרָה(パーラー)「多く実らす,繁殖する」の初出箇所を見て

みます。

【新改訳聖書2017】創世記1章22節

神はそれらを祝福して、「生めよ。増えよ。海の水に満ちよ。鳥は地の上に増えよ」と仰せられた。

この聖句の日本語訳「生めよ」のヘブル語が、פָּרָה(パーラー)「多く実らす,繁殖する」です。

それでは、この神の言葉は何に向かって命ぜられているのか前の節を見てみましょう。

【新改訳聖書2017】1章20, 21節

神は仰せられた。「水には生き物が群がれ。鳥は地の上、天の大空を飛べ。」

神は、海の巨獣と水に群がりうごめくすべての生き物を種類ごとに、」また翼のあるすべての鳥を種類ごとに創造された。神はそれを良しと見られた。

このように、神は水の生き物と翼のある鳥に「生めよ、増えよ、地に満ちよ」と祝福しているのです。

「水の生き物」すなわち「魚」は「神に贖われた異邦の民」を表し、「翼のある鳥」とは「イスラエルの残りの民」を表しています。

これらの者に向かって「生めよ、増えよ、満ちよ」と命じて祝福なさっ

たのは、神のマスタープランとしての恩寵が実現するという預言的な言葉なのです。

次に、פְּרִי（ペリー）「実」の初出箇所を見てみたいと思います。

【新改訳聖書2017 】創世記1章11節

神は仰せられた。「地は植物を、種のできる草や、種の入った実を結ぶ果樹を、種類ごとに地の上に芽生えさせよ。」すると、そのようになった。

これは、植物学的な「種」や「草」や「実」のことではありません。まだ光合成に必要な太陽や受粉に必要な昆虫が創られる前に植物が現れるのは不自然ですね。「種」は神の言葉であり、「実」とは御言葉と聖霊によって新しく生まれる新しい創造物、すなわち新生された者のことを指すのではないかと思います。

そう考えるのは、次のような理由によります。

上記の御言葉には「種」というキーワードがありますが、「種」はヘブル語ではזֶרַע（ゼラ）です。イェシュアの系図にホセアがいますが、ホセアの第一子はיִזְרְעֶאל（イズレエル）です。

יִזְרְעֶאל（イズレエル）には神が種を蒔くという意味合いがあります。

אֵל（エール）は「神」を意味します。זֶרַע（ゼラ）「種」の動詞のזָרַע（ザーラ）は、「種を蒔く」という意味ですが、その他に「散らされる」という意味と「実を結ぶ」という意味の両義性があります。「散らされる」とはさばきとしての「離散」を意味しています。また、「実を結ぶ」には神の憐みによって、集められる「回復」という意味があります。このように、ホセアの子供であるיִזְרְעֶאל（イズレエル）とい名前の中に、後にイスラエルの民が経験することが預言的に含まれているのです。（セレブレイト・スッコットーでの学びを参照しました。）

イスラエルの民は、イェシュアが神であり贖い主であるということに目が開かなかった為に、メシアなるイェシュアを十字架の死に至らしめました。そして、世界に離散させられる民となりましたが、終わりの日には主の霊によって目が開かれ、約束の民としての回復が成就します。すべては神のご計画の通りなのです。

このように、この御言葉の「種のできる草や、種の入った実を結ぶ果樹」は、イスラエルの民がやがて御国へと連なる民として立ち上がり、実を結ぶ民となるという神のご計画が予め預言的に示されているものと考えられるのです。神は実に後に起こることを初めから告げられるお方なのですね。

2. פָּרָה(パーラー)「多く実らす,繁殖する」とפְּרִי(ペリー)「実」についての考察

פָּרָה(パーラー)は、「多く実らす,繁殖する」の意味で詩篇128篇3節に次のように使われています。

あなたの妻は　家の奥でたわわに実るぶどうの木のようだ。

あなたの子どもちは　食卓を囲むとき　まるでオリーブの若木のようだ。

更に箴言31章31節では名詞のפְּרִי(ペリー)「実」が、次のように使われています。

　彼女の手が稼いだ実を彼女に与え、そのわざを町囲みの中でほめたたえよ。

これは箴言の一番最後の章ですが、賢い妻の在り方について綿々とと書き連ねてあります。さも、「このような妻になりなさい」との勧めのように受け取られがちですが、果たしてそうでしょうか。

「はじめに」で、私が申し上げましたように、これは、自分の努力で成し遂げることではなく、まさに「御霊の実」なのではないでしょうか。神のうちにあって歩むならば、自然とそのような者になるという描写なのではないかと思うのです。

しかも、「妻」といえば、イスラエルの民であり、イェシュアの花嫁である異邦の信徒をも思わせますね。

このようにפָּרָה（パーラー）「多く実らす,繁殖する」における「実」とפְּרִי（ペリー）「実」は、神のご計画の中に置かれた者たち（イスラエルの残りの者と信仰者である異邦の民）がイェシュアのいのちによって結ばれていく実なのだと思います。御霊の実とは、死と復活を経たイェシュアのいのちによって生きる者が神のご計画の中で結ばれていく実なのだと思います。人間的な努力や道徳的な頑張りによって結実させるものではないのですね。そのご計画の中に置かれた者とは、以下のような者たちなのではないでしょうか。

【新改訳聖書2017】詩篇 22 篇 10 節

生まれる前から　私はあなたにゆだねられました。

母の胎内にいたときから　あなたは私の神です。

もっと驚くべきことには、私たちがご計画の中に置かれたのは地の基の据えられる前だというのです。なんと、畏れ多く感謝なことなのでしょう。

【新改訳聖書2017】エペソ人への手紙 1 章 4 節

すなわち神は、世界の基が据えられる前から、この方にあって私たち

を選び、御前に聖なる、傷のない者にしようとされたのです。

御父が引き寄せてくださらない限りキリストのもとに来ることがないということがヨハネ６章44節には明記されています。

私たちは良い実を結ばせるために自力で捻出する必要はないのです。地の基が据えられる前からイェシュアの花嫁として選ばれていた我々は、御言葉にもありますように、その良い行いさえも神によって備えられているのです。

【新改訳聖書2017】エペソ人への手紙 ２章 10 節
実に、私たちは神の作品であって、良い行いをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。神は、私たちが良い行いに歩むように、その良い行いをあらかじめ備えてくださいました。

3.　פֶּרֶא（ペレ）「野ろば」のミドゥラーシュ

פָּרָה（パーラー）の関連語として、פֶּרֶא（ペレ）を調べてみたいと思います。פֶּרֶא（ペレ）には「野ろば」の意味があり、初出箇所は以下の通りです。

【新改訳聖書2017】創世記16章12節

彼は、野生のろばのような人となり、その手は、すべての人に逆らい、すべての人の手も、彼に逆らう。彼は、すべての兄弟に敵対して住む。」

פֶּרֶא（ペレ）「野ろば」には、気ままにさまよい、自分勝手な道を選んで単独行動をするという特性があるそうです。

פָּרָה（パーラー）「多く実らす,繁殖する」の関連語としてこのようなものがあるというのは一体何故なのでしょうか。

そのヒントとして、私は次の御言葉に注目したいと思います。

【新改訳聖書2017】マタイの福音書 7 章 17, 18節

良い木はみな良い実を結び、悪い木は悪い実を結びます。

良い木が悪い実を結ぶことはできず、また、悪い木が良い実を結ぶこともできません。

このように、「実を結ぶ」のは、良い実を結ぶこともあれば、劣悪な実を結ぶこともあるのです。そして、良い木であられるイェシュアにとどまっている者だけが良い実を結ばせるのですね。

【新改訳聖書2017】ヨハネの福音書 15 章 4 節

わたしにとどまりなさい。わたしもあなたがたの中にとどまります。

枝がぶどうの木にとどまっていなければ、自分では実を結ぶことがで

きないのと同じように、あなたがたもわたしにとどまっていなければ、実を結ぶことはできません。

次の御言葉にも注目したいと思います。

【新改訳聖書2017】ローマ人への手紙 7章5,6節

私たちが肉にあったときは、律法によって目覚めた罪の欲情が私たちのからだの中に働いて、死のために実を結びました。

しかし今は、私たちは自分を縛っていた律法に死んだので、律法から解かれました。その結果、古い文字にはよらず、新しい御霊によって仕えているのです。

肉にある者、肉によって歩む者は死のために実を結ぶというのです。新しい御霊、イェシュアのいのちによって生きる時にだけ麗しい実を結ぶことができるのですね。

今回、פָּרָה(パーラー)のミドゥラーシュに挑戦しましたが、結局のところ浮かび上がってくるのはイェシュアのいのちなのです。死と復活を経たイェシュアのいのちに連なり、イェシュアのいのちにとどまるならば、神が約束されたように豊かな実を結ばせることになります。しかし、イェシュアのいのちにとどまることさえも自分の力によるものではなく、ただただ、神のご計画の中なのですね。

しかし、私はこんな問いが脳裏によぎります。「実を結ぶ」とは、実際的具体的にはどんなことなのだろうかと。

御霊の実についても「愛、喜び、平 安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制です。」とありますが、ふんわりとしていて、掴みどころがありません。

何故でしょう。神の目から見て、פְּרִי(ペリー)「実」とはこういうものだからです。魂で推し計って、理解できるものではないからです。

【新改訳聖書2017】ピリピ人への手紙 4 章 17 節

「私は贈り物を求めているのではありません。私が求めているのは、あなたがたの霊的な口座に加えられていく実なのです。」

という聖句からも分かるように、神の目から見たら実とは霊的なものなのです。神は霊であり、פְּרִי(ペリー)「実」とはイェシュアのいのちから出てくるものなのですから当然のことですね。

マリアがイェシュアの足もとに座って主のことばに聞き入っていた時、苦言を呈したマルタに向かってイェシュアはおっしゃいました。「必要なことは一つだけです。マリアはその良いほうを選びました。それが彼女から取り上げられることはありません。」(新改訳聖 2017 ルカ 10 章 42 節)

「霊的な口座に加えられる実」と「必要なことは一つだけ」は関連があ

るように思います。マリアのようにイェシュアを慕い求めて、一心にイェシュアを見つめつつ御言葉に耳を傾けていることが、イェシュアというぶどうの木に繋がることであり、御心に適ってפָּרָה(パーラー)「多く実らす,繁殖する」ことになるのだと思います。

また、霊的な口座というからには、キリストの御霊の注ぎを熱心に求めていく必要をも感じます。イェシュアから出たものだけが良い実となって天に宝となって積まれていくということなのでしょう。私たち人間は不確かで心許ない存在ですが、ぶどうの木であられるイェシュアは確かで完全なるお方ですから、ひたすらに信頼して、このお方にとどまるならば、良い実を実らせていただけるのではないでしょうか。

ここでまた、一つの疑問が湧いてきました。

マリアはイェシュアの足もとに座り込んでいたとありますが、現在の私たちは、イェシュアの側に座っているマリアよりももっと御傍近くにいるのではないでしょうか。イェシュアのいのちである御靈が内側に住んでいてくださっているのですから。

そこで、どうしても気になるיָשַׁב(ヤーシャヴ)「座る, 住む, とどまる」というヘブル語をミドゥラーシュしてみたいと思います。

4.　יָשַׁב（ヤーシャヴ）「座る，住む，とどまる」のミドゥラーシュ

先ず、יָשַׁב（ヤーシャヴ）の初出箇所を見てみます。

【新改訳聖書 2017】創世記 4 章 17 節

カインは【主】の前から出て行って、エデンの東、ノデの地に住んだ。

重大な罪を犯したカインが、主から離れてノデの地に住んだことが記されています。この後の節で、神様がどれ程カインの罪を嘆いておられるかが分かります。

【新改訳聖書2017】創世記4章10節

主は言われた。「いったい、あなたは何ということをしたのか。声がする。あなたの弟の血が、その大地から私に向かって叫んでいる。」

神から離れたところに住んだカイン、神に背を向けてしまったカインに神が痛みを感じておられたことが伝わってきます。

「いったい、あなたは何ということをしたのか。」この言葉の中にはイェシュアの受肉から昇天、着座までの一連の贖いの出来事が備えられていることに対する神の深い感慨と嘆息の御心が隠されています。

また、「あなたの弟の血が、その大地から私に向かって叫んでいる。」という言葉は、アベルのように正しいことをしていても殺されてしま

う歴史上の全ての信仰者にも通じる言葉なのです。殉教の死を遂げた人たちの死は単に死で終わるものではなく、永遠のいのちに至る道が必ず備えられていることと、イェシュアという初穂に連なる復活は必ずあることを思わされました。

12節には、「あなたは地上をさまようさすらい人となる。」とありますが、それは、自分の力では元の場所には戻ることができず、軌道修正できない羊のように、私たちも神の助けと導きがなければ（神の贖いがなければ）決して神の御元に戻れないということを指し示しています。（木曜日アシュレークラスでの学びを参考にしました。）

新約聖書の中でיָשַׁב（ヤーシャヴ）が「座る」という意味に使われている大事な箇所を見てみましょう。

【新改訳聖書2017】エペソ人への手紙 1 章 20,21 節
この大能の力を神はキリストのうちに働かせて、キリストを死者の中からよみがえらせ、天上でご自分の右の座に着かせて、すべての支配、権威、権力、主権の上に、また、今の世だけでなく、次に来る世においても、となえられるすべての名の上に置かれました。

ここで、יָשַׁב（ヤーシャヴ）「座る」というのが単に位置的に神の右側に座るということを指しているのではないことは明白です。「神の右側

に座る」とは、イェシュアが“すべてのものの上に立つ権威”を与えられているという意味です。

その上、畏れ多いことに、私たちも天上に座らされていると書かれています。

【新改訳聖書2017】エペソ人への手紙 2章6節

神はまた、キリスト・イエスにあって、私たちをともによみがえらせ、ともに天上に座らせてくださいました。

イェシュアと共に既に私たちを天上に座らせてくださっているという驚くべき御言葉です。これは、私たちの天的な立場を言い表しています。キリストが十字架に架けられた時に、包括的にキリストと共に私たちも死んで、共によみがえらされ、天上に座らされたのです。キリストの死に取り込まれた包括的な死と復活を経た上で天上に座らされているのです。そのことを霊の目で見て信じて受け取る者は幸いです。

יָשַׁב(ヤーシャヴ)「座る」とは全体重を神に預ける状態です。完全なる依存的かつ安息の状態です。この霊性を持った代表的な人物として、先ほど問題提起をしたマリアがいます。新約聖書の中でもマリアの霊性は注目すべきものがあると思います。

【新改訳聖書1017】ルカの福音書 10章

（39節）彼女にはマリアという姉妹がいたが、主の足もとに座って、主のことばに聞き入っていた。

（42節）しかし、必要なことは一つだけです。マリアはその良いほうを選びました。それが彼女から取り上げられることはありません。」

マリアはイェシュアの足もとにיָשַׁב（ヤーシャヴ）座っていたと書かれているのですが、目の前に生身のイェシュアが見えない今の私たちにとって、果たして「座る」とはどういう意味なのでしょうか。

イェシュアが十字架に架けられ、死んで復活された後、イェシュアの御霊は私たちの内に住んでくださっています。先ほども触れましたように、イェシュアの御傍にיָשַׁב（ヤーシャヴ）座っているマリアよりも、もっと近く我々の内側にイェシュアは住んでいてくださるのです。

יָשַׁב（ヤーシャヴ）という言葉は、「座る」の他に「住む」や「とどまる」という意味ががあります。

ですから、マリアは、実際的にはイェシュアの傍にぺったりと寄り添って「座っていた」のでしょうけれど、キリストの十字架の死と復活を通して、主を信じる者は包括的にイェシュアの死と復活に取り込まれて、キリストに「とどまり」、キリストの言葉の中に「住む」者とされること

を指し示しているのではないかと思いました。

【新改訳聖書2017】ヨハネ 15 章 4 節

わたしにとどまりなさい。わたしもあなたがたの中にとどまります。

【新改訳聖書2017】コロサイ 3 章 16 節

キリストのことばが、あなたがたのうちに豊かに住むようにしなさい。

この言葉は真実です。あなたの家に住み、常にあなたをほめたたえる人はさいわいです。(口語訳聖書　詩篇84篇4節)アーメン。

5.　שׁוּב(シューヴ)「帰る、立ち返る」のミドゥラーシュ

יָשַׁב(ヤーシャヴ)の関連語としてשׁוּב(シューヴ)「帰る、立ち返る」を調べてみたいと思います。

初出箇所を見てみましょう。

【新改訳2017】創世記3章19節

あなたは、顔に汗を流して糧を得、ついにはその大地に帰る。あなたはそこから取られたのだから。あなたは土のちりだから、土のちりに帰るのだ。」

神が人を罪定めして語られた言葉です。アダムとエバは、蛇であるサタンに騙されて地を治める者としての立場を失いました。罪に堕ちて

しまい、神と断絶してしまった人間は永遠には生きることのできない存在(土に帰る存在)となってしまったのです。神との親しい関係と神への信頼と依存を失ってしまったのです。

ところが、שׁוּב(シューヴ)には「帰る」の他に「立ち返る」という意味があるのです。神が失われた人間をどれ程取り戻したいと強く願っておられるのかを感じます。聖書は神のご計画の書ではありますが、喪失と回復の物語であるともいえるでしょう。神には失った者を回復させ、永遠に神と共に住む者とするという壮大なご計画があります。

שׁוּבと(シューヴ)というヘブル語の中に「帰る」という意味と「立ち返る」という意味がある不思議さを思います。土に帰る者とされた人間を神に帰る者とし、ご自身に立ち返らせることによって、失われた者を取り戻したいという神の深い御愛を感じずにはいられません。

【新改訳聖書2017】ルカ 19 章 10 節

人の子は、失われた者を探して救うために来たのです。

そこで、次に、「立ち返る」という意味で使われているשׁוּב(シューヴ)を見てみます。

【新改訳聖書2017】哀歌3章40節

私たちの道を尋ね調べて、主のみもとに立ち返ろう。

神の御心から逸れてしまったイスラエルの民が悔い改めに導かれた時の言葉です。

サタンの誘惑に乗ってしまい、神から離れてしまって、神の庇護を断たれてしまった人間にとって、神との親しい交わりを結び直す為には、必ず、神に「立ち返る」必要があります。
神から引き離されている状態を認識して、神との交わりに戻るためには、神に背を向けて生きてきたという罪を認め、イェシュアの贖いに依り頼んで神に立ち返らねばなりません。これは、神との関係を回復するために必ず通らなければならないことです。旧約の時代には、贖い主なるイェシュアはまだ来ていませんでしたが、やはり悔い改め、神に立ち返る必要がありました。

ヨハネ 14 章 2 節には「私の家には住む所がたくさんあります。」とありますが、主にשׁוּב（シューヴ）立ち返った者だけが、主の家にיָשַׁב（ヤーシャヴ）住むことができるのです。

6. שָׁאַב（シャーアヴ）「水を汲む」のミドゥラーシュ

さて、次に、もう一つの関連語であるשָׁאַב（シャーアヴ）「水を汲む」を

見てみます。

この言葉の初出箇所は、やはり、創世記です。

【新改訳聖書2017】創世記24章11節

彼は夕暮れ時、水を汲む女たちが出て来るころ、町の外の井戸のそばにらくだを伏させた。

これは、イサクの花嫁探しの箇所です。アブラハムからイサクの妻を探し出して連れてくるように言いつけられたしもべは、アブラハムの出身地へと向かいました。しもべは、贈り物を携えて、その地へ赴いたのですが、イサクの花嫁探しの為の旅路で休んだところが、井戸のそばだったのです。イェシュアの花嫁である私たちもイェシュアという泉からשָׁאַב（シャーアヴ）「水を汲む」ことになるのです。

שָׁאַב（シャーアヴ）「水を汲む」という言葉から連想されるのは、サマリヤの女に語られたイェシュアの言葉です。

【新改訳聖書2017】ヨハネの福音書 4章14節

しかし、わたしが与える水を飲む人は、いつまでも決して渇くことがありません。わたしが与える水は、その人の内で泉となり、永遠のいのちへの水が湧き出ます。

私たちは神に立ち返ってイェシュアの血潮に依り頼む者となった後も、継続してイェシュアの与えてくださる水、すなわち、御言葉と御霊の助けが必要です。日々の霊の糧をいただかなければ、霊は枯渇してしまいます。

このように、私たち救われた者が、この悪しきものの支配下にあるこの世で歩む時に必要不可欠なのが、生けるキリストの御霊である永遠のいのちへの水なのです。

פָּרָה(パーラー)「多く実らす,繁殖する」から始まったミドゥラーシュは、שָׁאַב(シャーアヴ)「水を汲む」のミドゥラーシュに発展しました。

神のご計画のクライマックスである新しい天と新しい地にはいのちの水の川といのちの木の実が描かれています。さあ、ここに、שָׁאַב(シャーアヴ)「水を汲む」とפְּרִי(ペリー)「実」が繋がりました。そこで、もう一度פְּרִי(ペリー)「実」に戻ってみましょう。

7. 新しい天と新しい地におけるפְּרִי(ペリー)「実」について

新しい天と新しい地におけるפְּרִי(ペリー)「実」について考察したいと思います。

【新改訳聖書2017】ヨハネの黙示録 22章1,2節

御使いはまた、水晶のように輝く、いのちの水の川を私に見せた。川は神と子羊の御座から出て、都の大通りの中央を流れていた。こちら側にも、あちら側にも、十二の実をならせるいのちの木があって、毎月一つの実を結んでいた。その木の葉は諸国の民を癒やした。

同章14節

自分の衣を洗う者たちは幸いである。彼らはいのちの木の実を食べる特権が与えられ、門を通って都に入れるようになる。

この聖書箇所に出てくるいのちの水の川もいのちの木もいのちの木の実も全てはイェシュアを表しているということに気付いた時、初めてפְּרִי(ペリー)「実」の実態が分かったような気がしたのです。פְּרִי(ペリー)「実」とは、いのちの源泉であられるキリストご自身だったのです。そうであるならפָּרָה(パーラー)「多く実を結ぶ、繁殖する」とは、キリストの似姿となっていくことなのではないかと思いました。キリストと同型化していくこと、またはキリストが形造られていくことでもあるでしょう。

【新改訳聖書2017】ガラテヤ人への手紙 4章19節

私の子どもたち。あなたがたのうちにキリストが形造られるまで、私

は再びあなたがたのために産みの苦しみをしています。

また、次の御言葉を読んでキリストの似姿に思いを馳せました。

【新改訳聖書2017】コロサイ人への手紙 1章6節

この福音は、あなたがたが神の恵みを聞いて本当に理解したとき以来、世界中で起こっているように、あなたがたの間でも実を結び成長しています。

福音を聞いて理解してキリストのいのちを受け取るならば、פָּרָה（パーラー）実を結び、成長すると書かれています。キリストの似姿になるというのは、イェシュアのいのちを受け取った者が、この世においてキリストの花嫁として、キリストの身丈にまで霊的に達するようになることではあるけれど、御国にてイェシュアと一体となっていくことは確実なので、その時にこそ、本当の意味でキリストと顔と顔を合わせて似姿になれるのだと思いました。

まとめ

今回、פָּרָה（パーラー）「多く実を結ぶ、繁殖する」をミドゥラーシュし始めたのですが、調べていくうちに、疑問点や課題が膨らんできて、次々と展開していくことになりました。聖書は全てイェシュアについて、

また、神のご計画について書かれているものですから、全ての箇所は繋がっていて関連性があることが分かりました。聖書もこの地もイェシュアに満ち満ちていますし、全てはイェシュアを証しているのですね。ミドゥラーシュとは、イェシュア探しの旅かもしれません。この旅で、全ての全てであられるイェシュア、私の愛するお方に出会えた幸いを主に感謝します。

木曜日アシュレークラス

小澤雅子